

僕は笑止だった位だ。

でも斯うなつたらもう仕方がない。

破れかぶれだ。

僕は非常に破壊的な氣持になつた。

威脅の限りを盡して、襲つて来る者どもを防戦しなければならない。

僕は手初めに木刀で、金あみを突き破つた。

汽船の待合所が近くだから、仲士どもが澤山居る。

自動電話の蔭や、記念碑の横や、手水鉢のそばから、大勢が僕のデモンストレーションを、あ

つけにとられて眺め出した。

誰も拜殿の近くまでは寄つて來ない。

巡査がサーベルをガチャツカせて、一人駆け着け二人來、四五人來たけれど、井戸の方へ遠廻

りして、父や義母等の居る内庭へ潜む。

一間半ばかりの長さの額が、三つ三方に架けてあつた。